

精神科学と社会問題

目次

社会問題（中村康二訳）	5
自由と社会（中村康二訳）	10
精神科学と社会問題（伊藤勉訳）	25
社会機構の三層化（新田義之訳）	65
1 ドイツ国民とその文化界に告ぐ	65
2 社会機構の三層化	73
3 国際的観点における生の必要条件と社会構造の三層化	81
4 マルキシズムと三層構造	92
5 自由学校と社会三層構造	97
あとがき（河西善治）	108

社会問題

今日、社会問題を語るのには容易ではない。この問題について私たちが判断を下そうとしても、実に耳障りな雑音が巷に満ちている。およそ社会問題ほど「党派の好悪によつて紛糾」させられている問題はないし、これほど見解の対立が甚だしい分野もめずらしいのではないか。それにしても、なんと盲滅法な言説が飛び交っていることだろう。世間でよく吹聴されている意見を聞いてすぐ気づくことは、その提唱者たちがなんとも大きな眼隠しをしたまま、いわば独善的に、事実の世界をさ迷い歩いている人たちであることだ。

しかし派閥的情熱が社会問題の公正な議論を妨げているにしても、それが最大の障害であるとは思えない。党派の駆け引きに惑わされるのは政党活動に血まなこになっている人たちだけで、その埒外にある人間はつねに自分なりの判断を形成する可能性を持っている。それよりもっと深刻な障害は、現代の思想家、学問的素養も十分あるはずの現代文化の旗手たちには、社会問題といった

ような案件に取り組むための確かな道筋、いつてみれば方法論を見つけたす力がないのではないかと危惧される点にある。

学問的業績により世上極めて高い評価を得ている人たちが社会問題を論じた著作に触れるたびに、私は再三ならずそうした感慨に囚われる。私の見るところ、この分野では現代の研究者がダーウニズムの影響下で獲得してきた思考方法が、今のところまだ決して満足するに足る成果を挙げえていないようだ。誤解をさけるべくいえば、ダーウインの思考方法はこれまでに人類が達成した最大の進歩のひとつだと私は考えている。ダーウニズムは、もしそれが正しく、ということはその本来の精神に則して、応用されるなら、人間の思考領域すべてに喜ばしい作用を及ぼすにちがいない。私自身、『自由の哲学』なる一書によつてダーウニズムの真髄を汲む著作を世に送り出したものと信じている。私はこの本を独自の立場で構想し執筆した。私は人間の精神生活のもっとも内密な問題について考察を重ねた。したがって、ダーウニズムを特に意識したわけではないが、思想構築が終つた今となつてみると、私は結果的にダーウニズムにささやかな貢献をなしたのだという自負の念を禁じえない。

ところで、とりわけ昨今の社会学者たちの動向は、こうした私の期待を裏切るものが多いように

思われる。かれらはまず、ダーウイン的に思考する自然科学者たちに、君たちはどんなふうにして研究しているのかと尋ね、自然科学の方法をそのまま社会学の分野に移植する。かれらは単純にも有機的な自然界を支配している自然法則を人間の精神生活の領域へと置き換え、動物界で観察されるのとまったく同じ法則が人類の発展にも適用されると主張する。これは大きな誤謬ではなからうか。たしかにこの地球上には非常に似通ったある種の法則性が認められる。その意味ではこの見解には疑いなくまっとうな要素がある。しかし、だからといって世界のすべての領域にまったく同一の法則が働いているという必要もないだろう。ダーウイン主義者たちが発見した法則、これはあくまでも動物や植物の世界を支配するのであり、人間界にあつてはダーウインニズムの精神において考えられる法則を追求するのが筋ではないだろうか——もちろん、この求むべき法則は、前述した有機的進化の法則が植物界にとつて固有であるように、人間界にとつても固有の法則であるべきことは言を俟たない。つまり、私たちはダーウインニズムの精神に則して人類に固有の発展法則を思考し探求しなければならぬのだ。ダーウインニズムの法則を単純に人類の発展へ転化してみても、それは私たちが納得させる見解とはいえない。

私が特にこの感を深くしたのは、ルートヴィヒ・シュタイン博士の著した『哲学の光に照してみた社会問題』（フェルディナント・エンケ社、シュトゥットガルト、一八九七年）に触れたときである。以下、

同書をめぐって聊かの私見を述べてみたい。著者の観察方法は、もっぱらダーウィン流の自然科学において支配的な觀念にあわせて社会問題を論じようという意図によつて占められている。「一世代前に、バックレは新興の統計学の手法を駆使して因果律の概念がすべての歴史的生活に無条件で適用されることを証明しようとした。歴史における因果律の概念を確立しようとしたこのバックレの業績は、我々がダーウィンおよびその後継者たちの偉業を受けついだ今日、進化の概念に対しても適用されねばならない」(同書、四三ページ)。このような発想をもとに、ルートヴィヒ・シュタインは人間の社会的共同生活を支配している種々の形式の発展過程を考証する。その際、彼は「適応」および「生存競争」が動物の進化の過程と同様に、人間界においても大きな役割を果たしていると主張する。ここではさしあたり、そうした形式のひとつを取り上げて、シュタインの観察方法を具体的に検討してみよう。たとえば宗教の形式。人間は諸々の自然力のなかに存在し、自然力は人間の生活に侵入する。人間にとつてそれは害にも益にもなりうる。人間がなんらかの手立てを発見し、人間生活に役立つように自然力を応用することができれば、それは有益になる。人間は道具や機械を発明し、自然の力を有効利用しようとする。つまり人間は自らの存在をその環境に適応させようと努める。失敗や挫折も数多くあつたことだろう。しかし繰り返し挑戦するうちに、いつかは成功する者も出たことだろう。そうした者が勝利者として残り、自己保存する。失敗した試みは消えてゆく。有益なものは「生存競争」のなかで維持される。人間は諸々の自然力のなかに、人間の目に

見える現象だけでなく、不可視の力をも発見する。人類は純粹に自然的な力と並んで、それらを神聖な力と呼び、それに適応しようとする。人間は供物を捧げることによって宗教を發明し、神聖な力を活気づけることが自分たちに役立つと信じる。シュタインはこのようにして宗教のみならず、結婚、所有制、国家、言語、法律の發生を考察する。これらの形式はすべて人類が環境に適應するために發生したという。つまり、結婚や所有制等の今日の諸形式は、生存競争のなかで有益であることが明らかになったからこそ、維持されてきたのだと主張する。

シュタインは明らかにダーウィニズムを人間の領域へ転用しようとしている。

次号の論説では、同書にさらに触れながら、そうした転用が辿りつく結果を明らかにしたい。

これ以降は、ご購入の上、お読みください
みくに出版

精神科学と社会問題

ISBN978-4-8403-0402-3 C3010